

□ 371

岸澤三ノ

三歳の養子。天保四年二月市村に在りて武佐の上桐子。飯田所に住む。能石に付き三生病と云り死す。

□ 372

□ 二代目 佐々木八五郎

後典中

萬延元年十一月市村に在りて麻の紋番附と桐子連名に始りてその名を且見の某子と云ふ人の改名なりと云ふ不詳なり。文久三年に松格と云ふ。明治三年に豊中と改りたり。

□ 373

□ 初代 岸澤式松

猿若所三目茶屋前屋重兵衛と云う。嘉永四年頃から上桐子格の中は其名を列と云ふ字改三年から上桐子格となる。其もまた四代目古式部からも受はれ同人件已佐吉と云はれしは時には養子に也人かと思はれ一程と云う。萬延元年の分装の際双方より義理を以て、廃業せり。

□ 374

□ 常形名津文中

松新齋文中

文久五年十一月市村に在りて曲豆後大塚の多クニ味線と勤む。ニノ文中に曲豆後大塚の定子左六文中にや不詳。治考を待つ。文久三年正月市村に在りて松新齋文中と改む。

□ 375

□ 佐々木市二

文久五年十一月市村に在りて文中の上桐子。

376

常船名津芝江

後三目九藏 又二目是紅齋 (天保十一年)

本名田中鉄藏、四女組大夫の紅齋の奥子で声なきに三味線弾きとなり、
文久三年正月市村屋に移居音文中の上調子、その文字兵衛、三重即には添
上調子に上勤慶応元年閏五月市村屋に上り三味線となり、
九藏より更に明治十年頃から三重是紅齋と云ふ、明治十三年十一月十日没
至高輪論議亭に葬り、法号を誠心院詮道と云う、享年三十九才、めづらし
きをめづらし九藏と云う、座敷向の三味線あり由

377

初代常船名津文字兵衛

初八野大夫、八十松、後文佐 (天保十一年)

八十大夫

越後まゝに親は御治屋より本名と高坂文字兵衛と云う
文久三年九月(天保)市村屋に小文字大夫(五代目家元)の立三味線とて文左衛門と
共い番附に出づ、南御治所に住む、明治三十九年一月十六日没、六十七才
。瑞生大夫談、昔はよけの意地か悪くて仲向の最愛日あまうよけの衣、
晩年中風を登し、
。林中未と人談、娘は八野大夫と云ふ長が声かおなく、三味線弾きとなり
八十松と改め、万延三年常船名津山岸沢衛次郎の時文字兵衛と改名し、
文字ハの弟子であ。

378

常船名津文字助

初初代八百八

(文政四一明治十)

文政二年の歳旦本村らの名見中、文字ハの弟子で岸沢分離の時文字助と
改め上調子格となり、萬延元年一月市村屋に文左衛門の上調子として始見
出勤、文久二年九月市村屋に小文字大夫(五世家元)の立三味線を勤む
二代目文字兵衛の父、明治十年七月七日没、享年五十七才、築地福祥亭に
葬り

382

〇三代目山岸澤金藏

初妻勝藏 (弘化三)

初妻和佐大夫の件 秋田に在任

383

〇六代目山岸澤式佐

初妻巳佐吉 後五代目古式部

(三保四一明治三三)

五代目式佐の實子にて巳佐吉と稱す。天保四年津草地内に生ず。弘化三年三月
 市村屋に十四才にて嫁す。父式佐の上桐子に忠勤(弟)嘉永四年三保格とす。
 安政四年正月六代目式佐と稱す(三十五才)三保格とす。山岸澤分継後。
 父四女古式部政信は弟仲助と共に常磐津津に對立し、明治丁五年十月
 (五十七才)常磐津津と稱す。同十月新常磐津言以小文字大夫のヲテ三保格と
 勤め爾後引續き世居古勤あり。明治三十二年(六十一才)養子三代目
 巳佐吉に式佐と譲りて五代目古式部とす。世居古引継。向も古明治
 三十二年二月二十六日病歿す。享年六十二才。
 彼は五代目式佐の長男也。次男は神田錦所の正本向屋伊賀屋勤右衛門
 へ入婿せし。素行納まり不睦縁され。三男は三代目仲助也。末子の長女
 おていは古式と名乗て御近とす。
 〇松島に三保松の侯孺と作ぬあり。角田川の釣女。此の太田道隆と
 〇女陽子に似類

384

〇七代目山岸澤式佐

初妻巳佐吉(字政) 後七代目古式部

字政は年市を谷に生ず。常磐津津式喜大夫の孫。父は幼少の折病歿し九才
 まで祖父に育てられしか。後より津草山住み女。六代目式佐の養子とす。
 二代目巳佐吉と稱す。明治三十二年七代目式佐と相継。然るに同四年常磐津
 津家と再び内亂が起り分継し新派と稱す。大正十年七月七代目古式部と
 改む。古式部の名はこれより先祖父三代目仲助の由來から古式部と稱し、
 あり故これを二代に入れ。自今七代目とす。
 △〇三人片輪、〇うらめん、〇大森彦也